

日本遺産「山寺が支えた紅花文化」の物語性に期待

山形県の花は紅花。古くから最上川流域で盛んに栽培され、全国の生産量の約半分を最上紅花が占めていたことが江戸時代の記録に残っている。松尾芭蕉の奥の細道の一句「まゆはきを俵（おもかげ）にして紅粉（べに）の花」、近年では山形市高瀬地区を舞台にしたアニメ映画「おもひでぽろぽろ」（1991年公開、高畑勲監督）を連想する人もいるだろう。

山形市など7市町の「山寺が支えた紅花文化」が今年5月、文化庁の「日本遺産」に認定された。かつて、最上川の舟運で酒田へ下った紅花が北前船で京都や大阪に運ばれる一方、上方文化が紅花交易で本県にもたらされた。その歴史や関連する文化財がまとめられている。

交易が活発化した背景に立石寺（山寺）の存在が指摘されている。慈覚大師円仁が平安時代、比叡山延暦寺の別院として開いたという縁が、近江商人との交易につながったという。芭蕉が山寺を訪ねたのは尾花沢の紅花豪商に勧められたため、道中に詠んだのが「まゆはきを一」の名句だった。

日本遺産はテーマの面白さや独自性、外国人にも分かりやすい物語性があるかが重視される。貴重な文化財を生かし、より魅力的な物語を紡ぎだしていくことが重要だ。「山寺が支えた紅花文化」を活用した観光や産業の振興に向け、関係自治体、団体の連携を図る「日本遺産『山寺と紅花』推進協議会」が7月に発足した。

子どもたちに人気のジブリ作品の中で、「大人になって見直したら最高だった」という感想を聞くのが「おもひでぽろぽろ」。咲き誇る紅花畑、収穫作業の合間に朝日に向かい静かに手を合わせる農家、温かい山形弁、昭和の面影を残す街並みなど、心に残るシーンが多い。日本遺産「山寺が支えた紅花文化」も、印象深いストーリーで観光客をお迎えしたい。乞うご期待である。

山形新聞社 広告局企画開発部長 大隅茂樹



写真左：紅花の里として知られる山形市高瀬地区。今年7月には「紅花まつり」が開かれ、訪れた人たちが満開の紅花畑を楽しんだ



写真右：「山寺が支えた紅花文化」を構成する文化財の一つ立石寺の根本中堂